京城日日新聞

發行所 京城日日新聞社

能率増進と文化生活

法學博士 森本厚吉

上

或日テーラーは、鐵道人夫の指揮に鐵塊を運んでゐる一人を呼び留めた。そして御前は今貰つてゐる賃金の二倍の賃金が欲しくはないかと問ふた。人夫は早速それは結構だが其代りそれに對する苦痛も今よりは二倍するでせうと云ふた。テーラーは手を振つて決して苦痛は増さないのみが却つて今よりも樂であつて併も賃金は今の二倍になるんだと教へた。人夫は頼んだ、そして早速教へてくれと頼んだ。テーラーは其時一つの條件として絶對に俺の命令通りにするのだぞと云つて別れた。翌朝になつてテーラーは人夫の働いてゐる所に來て愈それを實驗すべく、時計と豫定表とを比較しながら、一擧手一投足に至る迄命令を以て働かせた。そして其日の夕方になつて、愈仕事の出來高を調べて見ると、果せるかな昨日に二倍する丈けの鐵塊を運び得てゐたのである。是はテーラーの科學的方面より研究する能率増進法であつて最善の方法を以てすれば或程度迄は能率を増進せしめ得るものなることを明かに立證したものである。

余はテーラーとは全然反對に、是を精神的の方面より實驗したのである。余は或日勞働者が畑の草取りをしてゐるのを見た、見てゐると二時間目に煙草を喫み三時間目に休憩をし一日の仕事は實に遲々として仲々進捗の跡を見せなかつたが、其翌日賃金を二倍與へることにして其仕事振を離れて見てゐると、煙草も喫まねば休憩もしないで働いてゐたが、其結果は昨日に倍するものがあつて併も少しの疲勞もしてゐなかつた。余は更に三日目は五圓の賃金を與へる事を云ひ渡した。その勞働者は何の爲に五圓の賃金を與へるのかと不審そうにしてゐたが、愈仕事に取りかゝると脇目もせずに一生懸命に働き、併も時々賃金のことを思ひ出してかニコ／＼笑つてゐたが三時より四時に至る最も倦怠を覺ゆる頃も、休憩せぬのみか欲も喜ぞとして樂しそうに働いた。そして仕事の高は更に増進してゐたのである。余は是に依つて、目的を以て當れば能率の増進することを確信したのである。

能率増進法には、メソポージ即ち方法に依るものと又精神的方面に於けるものとがあつて、テーラーの實驗したのは方法に依るものであり、余の試みたるは精神的方面より來るものである。由來日本人は論ずるに實驗で研究心に乏しく、社會殊に實業の方面に於ては之を顧みない者が多いが、米國などは盛に此能率の増進に就いて講究してゐるのである現に米國のメトロポリタンの保險會社には能率増進法を研究する一課の設けがあつて、一つの椅子の如きに至る迄其高低や角度の點に迄細心の研究を行ひ、二三十人の人を用ひて實驗した結果、足の重れる角度に依つて非常に、能率に差違を生ずることを發見したと云ふのである。斯くて二ケ年間の研究に依り、目下同會社のみにても百萬弗の能率増進を來したと云ふのである斯くの如く些の注意をすると否とに依り、能率の上には至大なる關係があるのである。

西伯利の習見

五 風俗習慣

一 姓名

露國人の姓名は自己の名父の名及姓の三種より成る例へば（男）イワン、ペソローウソチ、フョウドロル（女）アリヤ、ペソローナ、ソコリドルの如し

二 午睡

露國人は正午より約二時間午睡する例とす但し勞働者等にして午睡する餘裕なき者は自ら任意に午睡せざるに過ぎず從つて正午より午後三時頃迄の間に於ては他家を訪問せざるを例とす午後二時頃邸外に遊戯し居る子供より時間を訪はるることあるべし之れ家庭に鋼鑰を施し午睡し居る父母の起床時を知らんとする子供の智慧なり

三 家庭に於ける待遇

露國人の家庭を訪問せんか夫婦は悦こび之を迎へサモワルとて湯沸器を持ち出し紅茶を薦め能く飲み能く談じ以て快とす此際二三杯の紅茶を傾け主人の歡むる食物を快く食せんか大に滿足するを例とす

四 姓の繼承

露國に於ても姓は子孫之を繼承するものにして養子は養家の姓を繼承するは日本と異る處なし

五 露國は希臘教を國教とし他の宗教の侵入を許さず歸化せし他國人も第一着歩として宗教上同化せしめらるゝに至るものにして從朝室内に安置せる聖像に祈禱を捧げ且つ土曜日午後及日曜日の朝は寺院に集會讃美歌を合唱祈禱するを禮とせしも昨今此種の禮拜を廢するもの稀有となれり

六 入浴

寺院に集合する關係にや每土曜日には入浴するか又は身體を拭へ清むるを通常とし其他は各人の任意とす入浴場の構造中特に相違の點は夫婦風呂又は都屋風呂とも稱すべきもの併設しあるにあり此風呂は貸切りとなすものにして世人の眼界より脱し密會所として或は内密の談話所たるの感あり

七 新聞記事

我新聞の如く小説又は講談の記載なく更に艶物或は人の非行等の記事なきを特色とす

八 私娼

西伯利旅行者は長時間停車する驛の車場プラットホームを樂器類の聲に下に携へ逍遙する女子を見受くることあるべし又は夜間二三輪の草花を胸間に挿飾し若くは普通女子と異りたる服裝態度を爲し公園又は街道を彷徨する女子に遭遇することあるべし是等の女子に注目せんか其女子の自宅又は待合所の客たるを得べきも子孫にまでも害毒を遺傳すべき土産物を齎らせざるべからずと尼市附近停車場には此種の怪物を認めざるも、市内にありては言に選はず公園活動寫眞館等内を徘徊するを認めらる

九 食物と性質

露國人は肉食性即ち獸類、魚類、鳥類を主食物として攝取する關係にや自個本位たり報酬として何者かを獲得せんとは能く外來客を歡待するも其裏面には野心潛伏し彼等は能く談ずるも他人の言動に干渉せずと然れ共一朝鮮人曰く「露國人は舌にて喋るが爲め其云ふ處は舌の如く能く働く」と外國人の自己本位たるは其賭物を得すと又は飲食物を來客に薦むる場合には發露せらる即ち主觀的に之を賞美するの類之なり

十 衛生思想

肉食人種たる彼等は衛生思想幼稚にして何等の衛生上の施設として認むるものなく家畜禽と雜居の感あり宜なり牛馬類は彼等の唯一の資産なるを。

十一 虚言日

男女其他の惡口を爲し悪評することとなし又四月一日午前中は如何なる虚言を吐露するも之を恥辱するものなき其他の時日に於ては虚言を爲すもの比較的少しと云ふ

政界茶話

白雲翁

▲原山縣の會見、山縣大臣の會見など大分政界の噂が面白くなつて來たね。夫れに裏面ちや野黨の職合議なども段々本氣になつて行きよるちや、

▲何、原が山縣を訪問したのは山本權兵衞擁立運動の火の手が燃え上つたので其秘密を確める爲めちやとハツハ、新聞に見えて來たマダ早いよ、原が後繼内閣の話をしたなど恐らく四國の狀態から見た揣摩ちやよ、

▲山縣に密談をしたとすりや、モー今頃は噂が出て居る筈ちやがね、然し、政界は益面白くなるだらうて。

▲それに政友會の遣り方はどうちや國家と黨利が混交ちや、お負に話題を齎りて盛に賑やつたのは本當ちや、内外諸政の行詰つた事は恐らく我憲政史上曾て見ざる所ちや、

▲二十週年の祝賀など、山縣たるもの一言騷ぎをする、山縣の方ちや、近頃の民衆の念變やら、鮮人心理の惡化を心配して、チクリ／＼原にお灸を据へたのは事實ちやと云ふよ

▲何原は反對黨が普選運動など入らざる話を謂ふセイちやとても答へたらとハツ、、、マサカさうでもなからふが、月でも踊ると政界の噂は果れて

東京より

在京一記者

▲編輯長足下、人種平等案は過日一たび閣議にとりしも閣僚中再提出に反對する者あり未だ決定の運びに至らずと云ふ實に不思議の事と可申候

▲吾に自信も誠意もなくして講和會議に人種平等案を提出せるに就ては識者間に定論あり然れども既に一たび提出せる以上殊に政府が參加國の三分の二の同意を得たりとて國民に其成功を誇れる以上今更再び同案を國際聯盟會議に提出すべきや否やを協議するなどは心得ぬ儀に御座候

▲我全權は講和會議に於て平等案に就て我政府は全權の最善の努力と主張の貫徹とを國民に告げたり然るに未だ一年ならざるに政府に反對論起りて再提出とも否とも決せず

▲再提出の利害は別問題なり我國の國際的地位より見て再び此の如き不等案を提出するは不利益なるやも知るべからず然れども政府と全權との聲明は如何にするや全權が最善の努力をなし參加國の三分の二の同意を得て大成功を收めたるものならば何れも今更再提出を躊躇するにも及ぶまじきに非ずや政府の爲す所は實は不思議な事ばかりに御座候、不宜、

日日歌壇（投稿歡迎）

一人五首以內編輯局文藝係宛

その日のはて　骨々子

大空は星まばらにてこれやこの日の前路ひつそりいねたる嬉し

この日頃雨のやすねば作業厳しめ屋りて疲し一日の果て

創作 熱光の下を（二十六）

曉谷

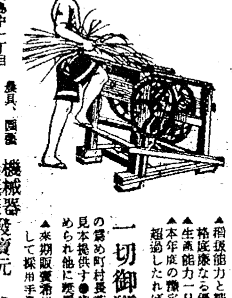
…を何うしたら好いものかと思ひ惑ふてゐた。急性な私は、躊躇にづほらな私は、愈出來なければ泣つても覺はないと捨鉢な心持になつて來るのだつた。然し斯う言ふ方面──いや、實生活にかけては何事によらず私よりも周密な頭腦を働かせるお阿母は、ちやんと用意を整へて、二十九圓の貯金、大きな釵を下げて來た其他、一寸した手土産まで揃えて來れて

「これで好いぢやないか…それてあるから何處へ出しても…しくは無い」と言つた。これでヤット安心したので、歳末の一日を立野までお歳暮に行つた。大晦日の夜を遲く迄お料理をしてゐたお前も、私と同様に一時頃までよく睡つてゐた位だから、何でも元日だからと言つて嬉しい事も悲しいこともなかつた譯だ。それでも年始にだけは廻つた。去年までは、お正月でも芽出度いと云ふ事を感じてゐないのなら、「お芽出度ふ」とは言ふまいと言ふので「お早ふ」と言つて濟まし込んでゐた私も、今年だけは慣例通りの「明けましてお芽出度ふござい、昨年中は何彼と御愛顧に預かりまして……倚本年も相變らず」を口上で連發して歩いた。さう言つた後で、「俺も普通の事をする人間になつて終つた」と思ふと、悲しい様な満足の語りを覺えて來るのだつた。然し流石に年賀狀だけは元日に書いた。十日も前からお芽出度くもないのに謹賀新年とか賀正とか云ふ虚偽の文句を書くのに忍びなかつたからだ。名刺受けの箱には、友人や後輩の名刺も例年より殖えた代りに、社會的に地位を行つてゐる先輩や自分とは全然沒交渉な路を歩いてゐる、あつても無くても好いやうな人の名刺も這入つてゐた。二日は初仕事なので、誰初めに一寸した絵を書いて切り上げた。それも、物固い親父さんに言はれて、漫々やつたに過ぎない。正月は人が澤山訪ねて來て五月蠅いから、早く立野に行かうと言ふので前の晩から丸髷を結つてそわ／＼してゐたお前は、出來るだけ粧ひた格好に念を凝らしてゐた。女は男を知ると一際美しさを増すものだと聞いてゐたが、お前も嫁いでからは詩全體に芳烈な匂と、女らしい調和とを見せて來た。落ちつきも出來れば、態度も滑らかになつて來た。

「ほんとに、お糸は綺麗になつたよ。色もずうつと白くなつて、垢抜けがした様ぢやの」と、何時かもお阿母が言つたことがあつた。──さう默つて停車場の方へ歩いた。俥で行きたいと默つたが、本宅の前を通らないと、ずうつと遠い路になるので歩いて行つた。「行つて參ります」とお阿母にお辭儀をしてもわざ／＼門口まで出て來て八百屋の嫁さんと、昆布屋のお上さんが挨拶して私と並ぶと、お阿母と三人で何かを私語いてゐた。大方綺麗になつたと云ふ位の話だらうと思つた。こゝで一寸默ひ出したが何時のことだつたか、お節姉さんが縁津に寄つたことがあつた。まだお節姉さんが結婚當時の頃その時計屋の裏を借りてゐたと言ふので時計屋のお上さんとは極めて懇意ならしい模樣だつた。それで、何彼と話しの序に、私の妹もこの先の壽家に嫁いでゐると言ふやうなことを言ひ出したと見えてその時に時計屋のお上さんが云つたことをお節にそつと言つたらしかつた。お前は暫らくの間何うしてもその事を云はなかつたが、後々斯うだと白狀したのは、それから五六日經つてからの事だつた。







内外電報

波統領戰線に立つ

波蘭大統領は自ら北方戰線に立ちて軍隊を指揮しつゝあり（巴里來電）

民主黨苦境に立つ
米大統領選擧形勢

米國大統領選擧競爭頗る激烈を極め今日の形勢に於ては民主黨苦境により共和黨の勝利を豫想さる（紐育來電）

飛船工場讓渡說

獨逸ツエツペリン飛行船工場は米國に讓渡せらるべし（巴里來電）

支那對聯盟會議

北京政府は駐米公使顧維鈞氏に國際聯盟會議出席を促し膠州灣還附と山東鐵道の直接交渉拒絕等を提議すべく訓示せり（北京來電）

經濟聯合會決議

經濟聯合會第二日は前日に引續き五日午前九時半より鐵道協會に於て開會出席者は前日通りにて重要事項を協議し何れも可決最後に日本郵船會社の寺島成信氏より左記案を本會の決議として政府に提出せんことを諮り滿場一致可決せり（東京來電）

決議案

一 左の諸案を外務農商務各大臣に建議すること

一 本會は政府が商業者の參考に資し商機を逸せざらしめんが爲め各國の商工業に關する緊要なる情報を今日より一層迅速に商業者に移牒するの手段を執られんことを希望す

畢つて岩谷氏（日銀）より二三希望ありて正午散會晝食後一同自動車を驅つて滿鐵及國勢調査局を觀察せり

佛荒廢地復舊

大戰の慘害を蒙れる佛國の荒廢地は其後着々復舊しつゝあり（巴里來電）

伊國大使更迭

羅馬來電に依れば駐英伊太利公使カルヨアリオスチ氏は今回駐米大使に任命せられたり（倫敦來電）

米軍指揮官

米國西伯利派遣軍指揮官たりしグレーブス第四師團長は當地にて職を解かれボストン第一師團附を命ぜられたり（馬尼拉來電）

定例閣議開催

五日の定例閣議は午前十時より首相官邸に於て開會田中、中橋、元田、床次、各大臣を除き原首相以下各大臣出席内田外相より最近の外交經過並に春事件の顛末報告ありたる後北支那饑饉救濟問題其他内外重要政務に就き協議し正午散會したり（東京來電）

勅參任命發表

四日附を以て左の辭令ありたり（東京來電）

任大藏省參事官 三土忠造
任遞信省參事官 小久保喜七

地方局長更迭

五日左の通り辭令ありたり（東京來電）

内務省地方局長 添田敬一郎
依願免本官
内務次官 小橋一太
地方局長事務取扱を命ず

添田局長辭職

内務省地方局長添田敬一郎氏は五日の閣議に於て辭職することに決定せるが同氏は今回添田博士の後任として勞資協調會に入ることに決定せるが爲なりと（東京來電）

政友八州大會

政友會北信八州大會は五日午前十時より櫻井市櫻井劇場に於て開會元田、床次、中橋、各大臣小川國勢院總裁、望月、小林、本部特派員、山本、杉田等幹部各代議士其他黨有志等約八百名出席山本悦太郎氏開會の挨拶をなし次で宣言決議を可決し盛會裡に散會せり

朝鮮事情說明
赤池局長政友會に於て

政友會内殖民部會は昨日赤池警務局長より朝鮮事情を詳細聽取せり（東京來電）

加藤憲政總裁

加藤憲政會總裁は六日仙臺市に於て開催の東北大會列席の爲め五日午後一時又濱口總務關係幹事長は午後十一時上野驛發汽車にて出發せり（東京來電）

總督訓示

十月六日裁判所及檢事局監督官會議に於ける總督訓示左の如し

今回各位が會同して親しく所見を陳ぶるの機會を得たるは予の洵に欣幸とする所なり

施政十年克く司法の獨立を維持し民衆をして裁判に信頼すること今日の如きに至らしめたるは各位精勵の結果にして予の大に滿足する所なり、然れども物久しきに亙れば自ら疑滯なきを保せず是今次司法官の更迭を行ひ後進の進路を拓きたる故以にして以て官界の氣風を新し地方の情勢に應じて人才を分布し事務の刷新を圖むとするものに外ならず各位克く其の意を體し部下を督勵して惰氣を一掃し時世の進運に順應して益々司法の威信を發揚することに努むべし近時不逞の徒動もすれば妄に人心を攪亂し公安を阻害する者尠からず司法の嚴正なる糾彈に依り之を防遏するの極めて緊切なるものあり殊に司法の任に在る者夙夜負託の重きを思ひ統治の方針を體し檢查糾彈に臨み克く機宜を誤ることなく以て統治の大業に資するの覺悟あるを要す

遞信事務分掌改正

朝鮮總督府遞信局事務分掌規程中改正の件六日發表されたり其要旨は從來の監理課計理課を庶務監理に改め遞信課爲替貯金課を…

興鐵株金拂戾

森鐵測量進捗

工業會社創立

仁取定款許可

東拓移住地作況
全州平野を除き概して良好

全羅北道　全羅南道　慶尚北道　慶尚南道　黄海道　平安南道　咸鏡南道

司法官會議第一日

道高等課長交迭

野砲二十六歸營

南洋の産業狀態
大谷光瑞氏談

日本　罷業　波止　毆打　商業　香水　將來　警戒

大阪より
大阪　一記者

印度爲替賣止

輸出刷子減少

大株理事の苦衷

移出制限令

運賃決濟會社計畫

綿ネルは弱含み

學校組合會議

仲買人賣買高

編輯室より

内地行片道復舊

商工業視察團

運輸派出員會議

醫專内地旅行團

山口鮮滿視察團

辭令（十四日附）

大谷光瑞氏出發

人事

商況

株式界

六日大阪入電後場

六日東京入電前場

京株市場出來値（六日）

仁川期米特電

十月六日前場

十月六日後場

東京期米特電

大阪期米特電

京阪金利

日銀帳尻

鮮銀券日報

執拗なる馬賊團 更に琿春を襲撃す

支那官兵も合し惡虐無類

滿街只寂として人影なく

戰慄すべき兵火、流血、掠奪の跡

國境各地不安に鎖さる

…警務局に到達せる情報に依れば三日午前九時同四日午前一時頃賊團再び琿春帝國領事館の北方より領事館に向ら射撃したれば警戒の歩兵隊の一部之に應戰したるのみにて賊團は退却したり我軍には損害なく敵の死傷は不明

なり敵は我軍が琿春訓戒間に架設したる電話線を切斷して挑戰し敵ひたるものにして駐屯支那兵は全部賊團に投入し今や一兵をも見ず官憲として巡警約一百名商埠地警察署に集合するのみ支那人朝鮮人は殆ど逃走し往來する者全くなく目下の狀態にありては琿春は容易に秩序恢復すること能はざるならん

前哨線に逆襲し

吾出動部隊直に擊退す ―軍司令部發表―

三日午後六時より十一時の間に亘り馬賊團の小部隊は屢々琿春出動部隊の前哨線に對し逆襲を試みたるも是を擊退す我軍の損傷無し

日本人を鏖殺せん

電線を切斷して侵入

渠等は揚言して曰く

三日夜支那工兵二百名は營長に反抗し賊團に投じ琿春間電線を切斷したれば我工兵は直ちに修復したるも再び切絕されたり尙賊團は官兵を混じ日本人を鏖殺すと揚言し居りて形勢益々險惡なり

安部少佐隊と交戰

再度襲來せる馬賊團は步哨線に於て安部小佐の一隊と交戰せり

七五聯隊急遽出動

慶源より憲兵も

龍井村危險迫る

避難民にて混雜を極む

避難民慶源に集合

各所に危險の兆あり

市民大會

各地に開催

不問に附す可らず

圖滿江岸防備重大

具體的に

第二回襲擊の追報

支那製舊式野砲を用ゆ

言語同斷の支那兵

戰死者

過激的の色彩濃厚

不逞一派＝馬賊＝露人

三者の聯絡全く成りて

邊境愈々多事となる



―久し振のお歸りを―

七日久し振りでの歸朝をお待ち兼ねの珍田大使のお孃さん（右）令孃雅子（十八）（左）令孃繼子（十三）

古事を模した記念郵便切手

國勢調査の史

第一回國勢調査記念郵便… 國の史實に依れるもの… 國勢を調査したるは… 大化元年國司に詔して… せしめられたるを… 便切手は當時國司が… ゝある狀を模したるも…

仁川暑道場開

仁川署內同好の有志の… 日午後五時半より同署… 道場を開放し… 外來劍士の來場を歡迎… 闘賊ゆるの時、書に… 武を錬る可く… なりフレーヤ…

露國人へ

聯絡に成功

軍隊を派遣する

嚴重交涉して

工夫電柱から墜落して慘死

其筋市中は關係

突如火を發して日曜學校烏有に期す

聖歌隊練習中の椿事

混亂甚しく死傷ある見込

紅蓮渦まく火災詳報

十分間に全燒 危ありし同…

▲第一報 ▲第二報 ▲第三報 ▲第四報

大會は二三日延期

青年會館又は國技館に開會か

案じられた小女連無事

鮮人飲食店組合

値下斷行

內地人側は何うする？

…物價の低落にも拘らず內地人經… ないか（仁川）

邀巡査殺し共犯

二名逮捕

獨立運動資金の

一皮剝げば遊蕩費

凄い脅し文句で各所を掠った

二人組の惡漢逮捕さる

引揚げ

九月十日午後七…

軍資金として一千圓を

搜索し 籤箱の抽斗より

鮮馬の鈴

紅燈私語 ロマーンス

（四）

シベリヤに泣く女

失戀に泣く芳江の發狂

…芳ちやん、御前樣のスウちやんから膝を貸て御上げな」と一人女は傍々芳江の手を採つて無理りに中島の傍へ押しやらうとし、芳江は赤い顏をして隅の方へ逃込んで終つた。

「好い對照ちやないか花嫁花婿……揃ひも揃つて……」一座は賑かに囃し立てゝ笑ひ興じた。其夜不…

晝夜の別なく芳江の室に入浸る

…江の心を不思議に思つた位である

◇四五日して中島は飄然遣りてやつて來て芳江を相手に一二本の酒を持て餘して泊つて行つた。二人の間に奈何心と心が結びつけはされたのであらうか。夫れは誰も知らなかつた。けれ共其の日から云ふものは殆ど中島は每夜の如く芳江の許に通詰めて、遂には店の仕事も手に付かず、支店長や友人の忠告も耳に入らず

…中島を一先づ內地の本店に泊び歸す事に話が付いたのであつた。互に故鄕を遠く離れた異鄕の空で堅く結び合つた燃ゆる樣な初戀の夢は、中島が受取つた本店からの轉勤の通知に依つて果敢なく消えて去つて終つた。始めて味ふ戀の末路の悲しさに泣いて泣いて泣き盡した芳江は、日の十日も經たぬ間に生れもつかぬ變り果てた女となつて終つた。今迄に見向きもなかつた露西亞人や支那人の客を自ら進んで取るばかりか密閉された閨房から漏れる其睦言は…

小説 判官 照手姫 （九十二） 旭亭櫻山口演

八郎猿の指揮を受く

何にしろ何處までも行つて見やうと、八郎度胸を据えて歩かうとしても、何分疲れて居るのでヒヨロ〱して足が進まない、スルと猿が背中を出しておんぶをしてと云ふやうな形ちをするから、八郎、ナニ此の畜生に背負へるものかと思ひながら、試みに猿へ手を掛けると、猿は人間を背負ふ通り、手を後へ廻し、身を起してヒヨイ〱ヒヨイ〱飛び初めた、其のどうも早い事、流石の八郎も眼を廻して八「ア、待て〱」何處へ行くのか道もない處を縫うて飛んで歩いて谷へでも落ちると危ない〱」といふ中にドン〱山奥に走つて來て、何だか知らん眞暗の處へ連れ込み、ドンと其處へ八郎



を降ろした八郎も薄氣味が惡いから手を出す事も足を出す事も出來ず、只ジツとして居る中に、彼の猿は右へ寄り左へ寄り、己れの額を八郎の顏へ宛て頻りに暖めて呉れる、斯くして居る中に時刻が經つて、ガラリと夜が明けましたから四邊の樣子をよく見ると、人跡絶えたる山の中、何處を見ても樹木が森々と茂つて居る、自分の居る處は岩谷の口元で、枯草のやうなものを敷き自分は其の上に坐つて居ります、軈て、ガラ〱〱と、岩谷の中で音がしたかと思ふと、白髮白髯の髮いこと、銀のやうな髮の三尺も長い、雪なす髮は大地を引摺る老人とは云へ其の面體々しく宛も壯者に異ならず、しかも眼光爛々として人を射るばかり、鼻高くして口大きく、白衣を纏つてツカ〱と其れへ出てました、其姿を見ると猿はヒラリと跡へ下り、宛ら人間が自分の主に仕へる如く頭を下げて禮をするスルと又暗い處からバラ〱と現れましたのは前の猿よりも少し小さい猿が五六疋、何れも頭を下げて老人に禮をする、是れぞ九州大友家の家臣にして、忍術氣合の術の奧義を究めたる大伴只衛助今名を白雲道人と云ふ、老人の姿を見るより、笠間八郎政忠、扨は我が訪ねんとする天狗と云ふは是れなるかと、後へ下つて兩手を支ると、道人は暫し八郎政忠の樣子を見て居りましたが道「汝は如何なる次第あつて斯る深山に分入り我を訪ねんと致すにや」八「拙者承はる所、其許には忍術並に氣合術と云ふを會得なされ望む者に之れを授けると承はり深山幽谷を事ともせず、是れまでは來つたり、何卒其の術を手前に授け與れまじきや」道「シテ又汝は何方の者なるぞ」八「さては手前は常陸國小栗の庄小栗の一族に致して笠間八郎政忠と申す者、忍術氣合術の力を以て、主家再興を致さんと云ふ手前の望み道人何卒許させ給へ」「此術を受けんとするには一朝一夕の難行苦行にては達すべからず、汝薪水の勞を取るとあらば、暫らく我が手許に仕へよ」八「有難き仕合せにございまする、如何なる事があらうとも、手前は先生のお手許に罷り在つて如何なる勞をも辭すでございません」道「吃度其の苦勞を仕遂げるか」八「仕遂げて御覽に入れます」道「又忍術について大切な勸忍と云ふ事が出來るか」八「如何なる事がありましても乾度勸忍いたしまして、先生の御言葉に從ひまする」道「さらば手許に置く事を許すであらう、さて其處に禪山の猿が[illegible]其の猿は手前が手許に在つて用を[illegible]すものである、君は汝に取つて兄弟子であるから其方は[illegible]つて能く其の猿の教へに從はなければならぬぞ」八郎政忠呆れ返つた、萬物の長たる人間に猿の教へに從へ……憮然としたけれども、考へて見ると、今白雲道人の云ふたのは此所の事だ是れも我心を試すのであらうと思ひましたから八「委細承知仕つてございます」

演藝案内

朝鮮郵船